

第三百七十九回 青葉会

平成二十九年十月二十六日(木)

午後六時〜八時半 文京区民センター

〈顧問〉

☆ 川合万里子 先生

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯

〈投句〉

星田啓子 山内天牛
川口孤舟 楠田彦十 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 宮内規雄 山崎亜也
山田けい子 渡邊盛雄
赤田堅 安部眞希子 伊賀山そらお 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章
福島正明 村田くに子 山本三恵

〈紙上選句〉

《互選句》

七点

☆ 名月の眼を病む我に慈顔かな (☆↓「名月の慈眼や眼を病む我に」)

五点

噴煙を染むる落暉や島の秋 孤舟 (そ・五・灯・允く)
かりがねの蒼穹に曳く点と線 全 (堅・ゆ・灯・啓・三)
☆◎陽だまりの運河のベンチ小鳥来る 弘子 (紀・万・孤・千・允)
☆ 倒れ木の湖底に透くや鴨来る 一灯 (眞・猛・万・ゆ・啓)

四点

雁渡る空に自由のある限り 孤舟 (眞・忠・敏・ゆ)
酔ひ痴れて来過ぎし駅や星月夜 健介 (猛・万・弘・啓)
☆ 十六夜の月の出待つ間酒一合 ゆたか (堅・紀・万・灯)
秋ともし父の青春古日記 全 (忠・龍・灯・く)

☆ 野放馬の蹄もて搔く草紅葉 一灯 (紀・万・啓・三)

◎ 玫瑰(はまなす)は実(ま)に海鳴りの海難碑 全 (眞・孤・弘・く)

◎ 人工知能の受付嬢やうすら寒 昇 (忠・孤・龍・正)

◎ そここで枝切る音や秋日和 啓子 (猛・孤・五・允)

三点

残り香や金木犀の散り敷ける 全 (そ・千・ゆ・允)
☆◎米粒のきらりと松茸ごはんかな 天牛 (猛・万・孤・千)

☆◎秋澄みて左脳のさえる夜明けかな 盛雄 (紀・万・千・敏)

☆ 孫走る抜かれて二位に運動会 紀久男 (万・弘・天)

☆ 白粉花(おしろい)や原発浜に風車増ゆ 全 (眞・灯・正)

☆ 白内障手術後に見る紅葉かな 忠彦 (そ・敏・正)

☆◎黄落に幽けき音のありにけり 孤舟 (堅・五・允)

☆◎渡り切る都大路のトンぼかな 彦十 (紀・万・孤)

◎ 嘶家に連れて行かれて江戸の月 全 (忠・孤・天)

☆◎朋と会ひ友と別れし深む秋 五郎太 (万・孤・三)

◎ 穴に入る蛙の脚の長きかな 弘子 (孤・天・三)

過ぎ去りし列車の秋灯愁ひあり ゆたか (堅・猛・敏)

視界ゼロ霧の吊橋渡り切る 昇 (眞・千・天)

◎ 帆曳き船霞ヶ浦の秋の漁 (三島スカイウォーク大吊橋にて)

◎ 山路行く廃寺(はいでじ)守る柿紅葉 啓子 (孤・ゆ・天)

(☆…下七↓「廃寺(はいでじ)を守る」)

二点

☆ また訃報秋晴れなれどがつくり来

紀久男 (忠・万)

☆ 秋晴に白寿の叔父は旅立ちぬ

猛 (そ・万)

王朝の色はなほ褪せず女郎花

孤舟 (五・龍)

野分あと若枝落つる散歩道

五郎太 (猛・弘)

☆ パリの灯がことさら滲む暮の秋

弘子 (敏・正)

☆ 秋霧や今は主なき隠居部屋

恵洲 (万・く)

☆ 秋晴れやジャズの音高き異人館

堂哉 (真・そ)

☆ ◎ 港出る霧笛別れを惜しみけり

ゆたか (万・孤)

日陰より日向のうれし秋に入る

啓子 (千・く)

☆ 秋霧や一人酒酌む一人の夜

規雄 (堅・万)

(☆:「一人」↓「独り」)

☆ べつたら市の帰るさ皿を買ふ

亜也 (紀・万)

(☆:語順を変えてみる↓「皿を買ふべつたら市の帰るさに」)

☆ 新蕎麦や女三人かしましく

けい子 (万・く)

(☆↓「新蕎麦や女三人(をんなみたり)が姦しく」)

日だまりにじつと動かぬ秋の蜂

天牛 (允・啓)

☆ 小さき手で月見団子を丸めけり

全 (万・弘)

小鳥来る岬の宿に拙句掲(かく)

紀久男 (三)

◎ 刻々と色変りする秋の雲

猛 (孤)

秋雨の狭間の陽光眩しかり

全 (そ)

こころして温め酒ぞけふよりは

全 (正)

極薄な鳴門に又焼うそ寒し

忠彦 (弘)

(大学病院の食堂)

芒垂る謝罪トツプの髪黒し

全 (啓)

賞品の炊飯器当て今年米

全 (灯)

二階よりアリア洩れ来る暮の秋

五郎太 (紀)

渤海の調べのどかに良夜かな

全 (紀)

(雅楽)

台風と選挙のこぼす余り風

弘子 (龍)

独り居やシヨパンの短調身に入みて

恵洲 (紀)

小鳥来る紅葉に朝日溢れしめ

堂哉 (ゆ)

止り木に男ごころの濁り酒

一灯 (敏)

仲秋やはや青ざめし月光る

啓子 (龍)

実を貰ひ漬けし榎櫃(かりと)酒早や十年(ととせ)

亜也 (紀)

アマルフイ黄金(こがね)の海に秋の虹

けい子 (正)

歯痛とて大きなやまひ落葉降る

盛雄 (紀)

●次回青葉会

十一月三十日(木) 年忘れ句会

鈴木演芸場昼の部見物↓築地「紅蘭」会費 口長

正月五日(金) 初芝居総見

新橋演舞場(昼の部)

一月二十五日(木) 初句会 文京区民センター

一 今回は天牛さんから9名出席。投句は随分久しぶりの彦十さん加え10名。社友会HP特別企画「秋の風景写真を見て一句！」の入選句（孤舟選者・優秀作品3句。佳作12句）掲載4頁と天牛さん寄稿文「常識外れの男」2頁を回覧しつつ、弘子さん、啓子さん寄贈のおつまみ。忠彦さん手配の軽食、そして啓子さんの佐渡土産・純米「真陵」、忠彦さんの吟選「張鶴」小生の純米「沢の鶴」と乾き物を賞味し乍ら開始。猛さん司会で御覧のように健介さん、孤舟選者、一灯さんが高得点でした。

HP以外にも回覧あり（一）「森の座」10月号（弘子さんら3人の草田男の句の鑑賞を連載）（二）眞希子さんからのFAX（三）孤舟さんからの欠席葉書（結社「浮野」40周年祝賀会出る為投句）（四）民放TV「プレバト」で人気の夏井いつきインタビュー記事（日経10月1日）の切抜。

二 関係者近詠

讚美歌に亡父の手蹟復活祭	万里子	角帽や底冷えの京ニ―チェ手に	規雄
吟行へ目覚めを急かす時鳥	全	―「NHK俳句」11月12日放映	高柳克弘選
詩友待つ水面を揺らす若葉雨	全	新蕎麦や天下国家さて措きて	恵洲
双つ蝶真昼の月へ纏れつつ	全	―10月NHKラジオ「文芸選評」	西村和子選
初鯉土佐の伯父貴の二升酒	全	外科医との対話上々秋澄めり	盛雄
吟行を揚羽の案内谷中路地	全	生も死もままにはならず秋刀魚焼く	全
桑の実を含み舌の根見せ合へり	全	秋麗ら踊り子の四肢宙を舞ふ	全
蜘蛛の子に竦みて妙齡婚活中	眞希子	―毎日新聞10月兵庫文芸	若森京子選
ひいばばの遺影に一札日焼して	全	長き夜のグラスに浮かぶ孤独かな	盛雄
何役もこなすままごとミニトマト	全	書を閉ずや桜紅葉を葉とし	健介
手帳へ姑の介護日程雲の峰	全	新酒酌みジャズにどっぷり北野町	紀久男
腰赤燕ふくふく漁港の電線に	弘子	―ささらぎ句会10月	
燕住む漁協がバスの折り返し	全	秋の雷何処かで火葉の匂ひして	正明
脇畑の花から供へ盃蘭盆会	全	何となく違和感持ちて木の実落つ	全
来たバスへ乗るやうに逝く白日傘	全	恥しくなるやうな名や赤林檎	全
あの頃へ戻す香水デオリツシモ	全	連なりて海の果てまで鰯雲	允章
にはかなる庭のにぎはひ秋に入る	青史	長き夜の静かにジャズの流れけり	全
新米の粥の一匙妻の膳	全	秋霧の囁くやうによもすがら	全
つくつくし因果含むるごとくなり	全	仁清の茶壺に遭遇美術展	千恵
先が見えぬ霧が壁とも襖とも	全	ありんこや引張り担ぐ蟬の羽根	全
―「森の座」11月号		秋蝶や庭の花蜜にご執心	全
台風の行方気にしつ山陽道	そらお	爽やかな八十五才岸恵子	恵洲
嵐待ちしばしの風や有明海	全	コスモスの駅を駅長独り守る	全
秋雨や大社を目指すバスの列	全	駐在所裏が住居や吊し柿	全
楊枝挿し爺の技なり木の実独楽	堂哉	長老と唄ふ歌舞伎座秋日和	紀久男
秋暑シタクトの止まる幾度ぞ	全	三百年の晴舞台了へ栗弁当	全
秋祭日ごと息合ふ群れ太鼓	全	喝采浴ぶ豆成田屋の踊りかな	全

三 社友会HPの投句募集は19名から53句の応募あり、中々好評のようです。全句紹介したいほど高水準ですので次回その一部を掲載したいと思えます。

HP編集委員各位のご尽力に感謝し第二弾を期待するしだいです。

第一席 「彼岸花母と素直に向き合へり」 岡崎誠之助

第二席 「柿すだれ遊び疲れし子が戻り」 大西公一

第三席 「曼珠沙華パレットに赤絞り足す」 朱牟田恵洲